
それゆけ！ 時給戦隊アルバイター

雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター

【Nコード】

N6031E

【作者名】

雪子

【あらすじ】

君たちは彼らを知っているだろうか……Drワイリーに作り出された彼らのことを！知っている人、知らない人、ロックマンに少しだけ興味があるなら見て欲しい……彼ら……ロックマン5に登場した八大ボスが世のため、人のために……戦う勇姿を！

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター（前編）（前書き）

ロックマン9発売決定を記念？して、書いてみました。

登場ロボメインはよりにもよってロックマン5のメンバーです。

人気のある2、3とか、元祖1でもなく……変り種の4、ファミコンの最後の作品6でもなく、5のメンバーです。

尚、メガミックス（有賀ヒトシ先生）の設定を引用しています。しかも捏造設定もあるので注意してください。

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター（前編）

もともと自分たちは占拠した建築物の管理用に造られたロボットである。しかも地球に優しい廃棄物再利用型である。資金不足のために……大体前の戦いから二カ月後にいきなり世界征服を狙ったのだから……初期案からかなりかけ外れた口ボになったモノもいるくらいだ。

敵を心理的にかく乱し、そこを叩くようにする方法を用いて戦ってきた。だから純粋に攻撃力を特化した戦闘タイプなどがある前期のメンバーと比べると我々五期メンバーズの戦闘能力は劣っているとでも仕方がない。

でも、ワイリー博士を想う思いは他のメンバーにも負けない！

そして今日も彼らは主人のためにできること——借金返済のために遊園地のアルバイトに勤しむ！

時給戦隊アルバイターショー

屋外の会場の案内に掲げられた看板である。

上映時間は丁度一時……今、そのときである！

橙色、赤、緑、などといった煙だけはもうもうと立ち込めるステージの上に彼らはいた。

「スター・ゴールド！」

「グラビティー・レッド！」

「ナパーム・パープル！」

「ストーン・ブラウン！」

「チャージ・オレンジ！」

「ウェーブ・ブルー！」

「ジャイロ・グリーン！」

「クリスタル・スカイ！」

その掛け声とともに爆風が唸りを上げ、大気中の煙が消え、彼らは観客たちの前に姿を現す。

「世（遊園地）のため！ 人（お客様）のため！（給料のため）
（小声）BYウエーブマン）我々は戦う！ 人よんで……時給戦隊アルバイター！」

リーダー・スターマンを中心に一糸乱れぬ動きで得意のポーズを決め、ステージを見ている周囲の子どもたちからは惜しめない歓声が寄せられる。

「この遊園地は俺たちが守おおるう！（魂の叫び）」

親方やスタッフの粋な計らいでテーマソングもでき、すでにみんなの遊園地エインパークの名物と化した八体のロボットは今日も人（お客様）のため、汗（冷却水）を流しながら、ヒーローショーを演じる。

敵の怪人、戦闘員もまたアルバイトの青年達なので殺傷力は無いがやたらに派手なモーションで敵（だから同じアルバイトの人）を倒し、連れ去られた子どもたち（お約束）を解放する。

極めつけは、

「アルバイターの活躍により、遊園地の平和が守られました。今日もありがとう、時給戦隊アルバイター！」

解説の綺麗な学生バイトのお姉さんの声とともにヒーローショーの幕が閉じた。

「ふう、今日もお客様にうけてよかったな」
差し入れのE缶で喉を潤す、ジャイロマン。

「まあ、ミーたちの演技も伊達ではないってことでしょう」

「深夜まで特訓したかいがありましたね」

スターマン、クリスタルマンは笑顔で肯定する。

他のメンバーはすぐに持ち場に戻っているが、三人はこれから休憩時間に入っているのでくつろぎタイムに入っているのだ。

でなければ親方にさぼるなーって即座にどやされる。時給が減るので、コンマ二桁でも彼らはしない！（時給戦隊アルバイターメモ
1）

「でも最近ワンパターン化、マンネリ化しているようですから、そろそろ新しい台詞も考えませんといけませんね……」

しかも時給アップのために日々彼らの電子頭脳は働いている！（
時給戦隊アルバイターメモ2）

「お、クリスタルそんなことわかるのか？」

客の反応はよかったのでジャイロはそういう気にはならなかった。

「はい、占いにそう出ています」

ズゴ。

ジャイロはこけた。

「なら、新しい台詞を考えなければいけないネー」

「そうですね」

スター、クリスタルの意見に賛同。

「お、お前ら」

こけたために頭の飾りが少々ひしゃげているがジャイロはこの弟機

たちにつつまなければならぬ。

この二体……ゴールドとスカイは自分たちがロボットだというのに……なぜか占いやら夢やらと幻想的なものが好きなのだ！（時給戦隊アルバイターメモ3）

個々の趣味としてなら申し分ないのだが、時々あたかも本当に起きてしまったことのように話してしまうので、周りが大混乱に陥ったこともあった。

たとえば……。

回想中――

「ストーン、大変ヨー！」

「ん？」

その日、たまたま自分たち五期メンバーズはワイリー研究所（ボロ屋敷改造）に全員集まっていた。

リーダー格のスターマンがストーンマンに駆け寄ってきた。

「ナパームが、ナパームが……ウィルスにやられて……この研究所を破壊しているのよ！」

ナパームマンのナパームボムが弱点武器であるストーンマンでは太刀打ちができないのは明白。

それで自分たちはナパームを抑えておくからと、ワクチンを作る博士を急遽呼びにいくように言伝。

どんな、ウィルスかは知らないが凄惨な形相で言ってきたのでストーンは本当のことだと思い、丁度向かいの小屋で一人修復作業をしている、父ワイリーを大急ぎで呼びに行ったのだ。

ここ三日間徹夜続きの、父を。

ナパームと自分はそんなことになっているとは知らず、研究所近くの湖で博士のためにおいしい魚を釣ろうと糸をたらしてほのぼのしていたのに……。

クリスタルの占いを真に受けたスターの話だとわかった、一同呆然とした。

父は、よかった、よかったと笑って許してくれたが……修復を受けていた兄ロボが許すわけが無かった。

しかもよりにもよって……その兄はメタルマン。

ワイリーメカの最古株、博士至上主義かつ説教が長いので有名なロボである。

騒動の発端のスターはともかく、ほとんど被害者であるストーンマンも足が紫色に変色するまで、正座させられたという。

——回想終了。

思い出してジャイロマンは身震いがする。

クリスタルの占いを真に受けないようにとスターに何度も説得したが——今日もまた言い聞かせないといけない。

そりゃ、お客様の笑顔を見られるならば、至福であり、栄誉なことである。

しかし、クリスタルの占いでリニューアルしました、お客様にうけました、なんてことになったら、スターが増長するのが目に見えている。

ほら、占いも役に立つでしょうって。

（ここはある程度の冷却期間をおかないと……）

いずれは新しい台詞や技を追加するにしても……今はまずい。

「あのな……スター、クリスタル……、まだ早いんじゃないか？
この間台本書き直したばかりだし、それに親方の許可も取らないと」
「うっ」

親方という言葉は、時給戦隊アルバイターにとって天空の城を崩壊させる最後の言葉に匹敵する。親方によって給料の上下が決まり、特別ボーナスも決まるのだから！（時給戦隊アルバイターメモ4）

「そ、そうね。親方に言わずに勝手に決めてはいけないわね」
スターマン思い直す。

（よし！）
ジャイロは心の中でガッツポーズをとった。

「でも……」
クリスタルの方は不満げであった。
いつもは冷静で几帳面なくせに、自分の占いのことになると頑として融通の利かない面がある。

「早いほうがいいと思うのですよ……」
自らのボディの水晶が疼いている。
「アルバイター、危機……」
っていう単語が私の頭の中で、はなれな
いのですから……」

「その予言は片言なのか？」
ジャイロはまだ時間もあることだからと、暇つぶしにクリスタルの言葉を繰り返してみる。

アルバイターと危機。

たしかにその単語からだったら当遊園地での時給戦隊アルバイターの人気の危機だとクリスタルマンは判断したのであろう。

だが、遊園地の平和を乱す不躰な敵が現われるということという可能性も無かっただろうか。

しかも自分たちロボットに対して有効である、ウィルスによる遊園地乗っ取り事件だと……。

（なんて、な……）

ついついこの二体について自分も想像力が豊かになってしまったらしいな、と自嘲気味にジャイロは笑う。

「あら、ジャイロ。そういう考えもあるわね」

「……」

ジャイロは飲んでいたE缶を置く。

（わ、忘れていた……）

時給戦隊アルバイターは強く結束するためおのあの考えを無線で通信しあう技能がある。特にリーダー格であるゴールドにはみんなの考えをテレパスのごとく瞬時に読み取れるのだ！（時給戦隊アルバイターメモ5）

「さすが、ジャイロは考え方が違いますね」

既にジャイロが思った考えがスター経由でクリスタルに転送されたらしい。

ジャイロは赤面する。

（あゝ、これ絶対ネタにさせるゝ！）

拝啓 研究所にいる親愛なる父ワイリー博士様へ

猛暑の候、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。そして日頃は大変お世話になっております。

俺、ことジャイロは今占い好きたちの妄想、爆走に命がけで阻止したと思ったのですが……どうやら逆に俺の……浅はかな考えで拍車をかけてしまいました。

不甲斐ない俺を許してください。

敬具

後はこの文章をプリントアウトして、伝承鳩に括りつけようかと、ジャイロは真剣に考えてしまう。

一つの、けたたましい爆音が鳴り響くまでは……。

ガガガガアアア！ ビガア！ ズドドドオオオオ！

「な、何！」

「外に出ましょう！」

ジャイロとクリスタルは扉に一直線に向かった。

お客様の安全を守るのが課せられた使命である！（時給戦隊アル
バイターメモ6）

ただ、スターマンだけは出遅れた。

背中にプロペラがあるスピードを重視したジャイロならともかく、
クリスタルとは足の速さはタメであるのに……いや、彼は外にいる
メンバーが感じたものを読み取って状況を判断しようとしたから、
少し足の動きが疎かになって……速くいえば鈍くなった。

五体分すべて……いくらスターが衛星基地をたやすく操作する高性能CPUだとしても、同時期の、基地を制御するために造られたメン
バーズの確固たる許可なしで……ほとんどハッキングに近い形で
読み込んでいるので、あまりの負荷に頭脳であるCPUが少し悲鳴
を上げているが、必要なものを読み取らないと……読み取り終わっ
てスターマンの顔が洩る。

「やな…電波が鳴り響いている……ね……」

数分前

最初にこの異常に気がついたのは風船を配っているレッドことグラビティマンだった。

いつもポケポケとしている彼だがそれは必殺技のコストによるものである。重力を扱う能力にはものすごいエネルギーがかかる。ゆえに普段は省エネ対策として身体に負荷が余りかからないようにとボ―とすることでエネルギーを抑えているのだ。

だからといって何も考えていないわけではない。

お客様が笑顔で帰られるよう、日射病や熱中症といったものがおきないようにと、子供たちに風船を配りながら目を凝らしている。

アルバイターのメンバーは目に備え付けられたサーモグラフィ―を使用して、人間の体温から異常がないか計測。もし、体温が上昇傾向であったならば、飲み物を勧める、という遊園地の売店も喜ぶ呼びかけをするのである！（時給戦隊アルバイターメモ7）

そしてその目から異常に熱を持ったものをグラビティ―は見た。どうやら人間ではなく、自分たちと同じ機械のものであったのでとりあえずは安心したのだが……機械が――この遊園地に備え付けられている警備ロボが、ここまで熱を持つ処理をすることがありえるだろうか？

構造上ありえない。

ありえるとしたら……なにか外部からものすごい量のデータを入れ込まれているときぐらい……。

「あ、あぶない！」

持っていた色とりどりの風船が宙を舞うのも同時だった――警備ロボが、子供たちに向かって持っている電磁警棒を振りかざしたのと。

グラビティの胸のランプが光る——必殺技を繰り出すための信号を出しているのだ。

エネルギーは十分……システムオールグリーン……発動！

「グラビティーホールド！」

敵——グラビティの任意で定められた警備ロボが宙に吸い込まれるように飛ぶ。

「な！」

遊園地総合受付のナパームマン。

「へ！」

西側にあるトイレ掃除を済ませ、次は中央トイレに向かっていたウエーブマン。

「ん！」

ミニ機関車の運転主チャージマン。

「ぬ！」

観覧車の係員ストーンマン。

外で待機していたメンバーは宙に浮く——仲間のグラビティーマンの力によってお客様に危害をくわえようとした敵を見た。

「何でこんなことが……」

ナパームマンは座っていた受付の席から出る。

遊園地の機材を担当しているストーンとチャージの方はその遊具で遊んでいた客を避難させることが第一任務になるが、ナパームとウエーブ、そしてグラビティはこれといった持ち場がないことから、異変が起きたらすぐにその現場に足を進ませるように親方に言われている。

ナパームは緊急マニュアルに沿って打ち上げられた警備ロボのもとに向かおうとするが……。

「ナパーム、大変だ！」

「親方！」

親方自らがナパームを引き止める。

「どうしたのですか」

急に走ったのであろう——息を切らし、親方が心臓を抑えながらナパームに目を向ける。

「け、警備ロボたちの制御室が何者かによつて、封鎖されている！」「制御室——そこから直接警備ロボを操りお客様に危害を……。」

「わかりました。仲間に連絡しつつ、制御室に向かいます」

足についているキャタピラーをフル稼働させ、ナパームは制御室に向かった。

案の定制御室の扉は閉じられていた。無数のセキュリティシステムを突破する時間がもつたないと判断した歩く火薬庫ことナパームは己の武器である、ナパームボムを取り出し、投げつけた。

ガガガガアアア！ ビガア！ ズドドドオオオオ！

その爆音が休憩室にいた三体のアルバイターたちの耳に響いたのだ。

「ジャイロ、クリスタル、制御室のほうにいくわよ！」

「お、おう」

スターマンの号令。

休憩時間中の彼らもまた、異変が起きたらすぐにその現場に足を進ませるという緊急マニュアルを第一としている。

とっさに皆のデータを読み取り、スターが言っているのだとわかった二体は拒否も何も無く、制御室に向かって走った。

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター（前編）（後書き）

彼らを選んだのは、作者が戦隊ネタ好きだからです。
同士、求めています。（切実）

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター（後編）（前書き）

オリキャラ参上。

あと、かなり設定いじっているところもあるので注意。

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター（後編）

コンピュータウイルス。自分たちロボットにとってみれば厄介でこれ以上の天敵は存在しない気がする…… ロックマン以外で。

だが父が作ったプロテクトは強力で、世界で高名な科学者だろうとそれこそロボット工学随一のライト博士だろうが我々ワイリーナンバーズの電子頭脳を狂わすことはそうそうない。だからこそ直接の戦闘以外で我々を止めることはできないのだ。

……そんな油断があつた、からなのだろう。
まさか……こんな手を使つてくるとは思わなかつた……と……。

——エインパーク警備ロボ制御室。

ワイリー博士の研究所にあるものよりは稚拙ではあるものの、毎年きちんと業者のメンテナンスを受け、安全管理がなされている。

「ナパーム！」

先に手荒な方法で制御室に入った仲間の名をジャイロは叫ぶ。

「いくら緊急時態度いえども扉を爆薬で粉碎するのってまずくないか？」

五期ナンバーズはハッキング能力に長けた集団ではあるものの、武器や能力の構造上の問題で個人差はある。とくにナパームは体の中にあるプログラムが己の武器である弾丸を制御するのに持っていない点があるので、時間が惜しいときは実力行使のほうが早いのだが……。

木っ端でなんか水中にいる動物性プランクトンを連想してしまいそうな……惨状なっている扉には顔が渋る。

「まあ、警備ロボが暴走しているのならば一刻も争えないはたしかですけどね……」

「クリスタルの言うとおりヨ、ただの建築物ならば修繕すればいくらでも替えが利くけど、人（お客様）は傷ついたらそれでおしまいなよ！」

「スター……」

くどいようだが、時給戦隊アルバイターはお客様の安全を守るのが第一なのである！（時給戦隊アルバイターメモ8）

そう——それはどんなときも。

時給戦隊が時給戦隊らしくある限り。

好きなもの（給料）好きといえる気持ち大事にしたい。

スターマンの中心の星が光りだす。

「？」

ジャイロはどうしてスターが技を引き出そうとしたのかわからなかった——五秒前までは。

「スター・バリアー！」

スターの命令に瞬時に動き出す黄金の星たち。

そしてありえないと思っていた爆音が鳴り響くのと同時だった。

「な！」

ジャイロたちはもちろん遊園地の機材に危うく飛びかかろうとした、アミューズメントパークに不似合いなそれらは——守ることに限定するならば木の葉を操る自然派ウツドマン、封印されている戦闘兵器スカルマンや植物たちの寵愛を受けているプラントマンをも凌駕

する有効射程範囲を持つ、数多の星たちによって——無差別に向かつてきた無数のミサイルと爆薬をすべて飲み込み、消滅させていく。

「な、なぜ……」

ジャイロの瞳が信じられないと訴えている。

防衛システムによるミサイル攻撃などといったものを遊園地がここまで武装しているわけがない。ならば……考えられる可能性はひとつしかない。

「まさか、あんたまで乗っ取られると思わなかったわ……ねえ、ナパーム……」

彼がいたところがたまたま暗かったことと、僅かに残っていた爆煙によりよく見えなかった紫色の巨体——制御室の入り口からその姿を西に沈みかかった太陽が照らす。

エメラルドグリーンの瞳が赤——ウィルスの侵攻によるバグ——に覆われた歩く武器庫の姿が顕わになる。

「ククク……」

ナパームの口から——いや、ナパームの声ではない、何かが喋ってくる。

聞き覚えがないが……何か嫌な感じがする。ねちねちとした陰湿的な——同じワイリーナンバーズで言うならば戦略や狂気、執念深いといった人間でいう負の性格が反映されているロボット……失礼ながら、フラッシュやスネークを思い起こしてしまうぐらいの口調である。当人たちがいれば心外だと言われそうだけど（汗）。

とにかく武器おたくではあるが根がいいナパームのそれとはまったく異なっている！

「誰だー！」

思わず、ジャイロは尋ねてしまう。

「フン、資金不足でジェットエンジンではなくプロペラになったジャイロ・グリーンではないか……」

またの名を不運ロボ。

「そんなこと、問題ではない！」

ジャイロは必死になつて怒りを静める。

今ナパームは正常ではない。それに、ナパームを犯しているウィルスがどんなものかわからない今、下手に突っ込んでしまったら、ナパームの二の舞になることは確実……ここは遠隔操作型のジャイロアタックで様子を……。

「その必要はありませんよ、ジャイロ」

クリスタルマンの頭の水晶が光る。

「私もまさかこのタイミングだったとは予想はできませんでしたが……ナパームを操っている……いえ、この場合は巣くつているといえはいいでしょうか」

水晶をつけた腕からクリスタルのガーネットに輝く瞳が映る。

「ただの警備ロボ乗っ取り事件とはいいいがたくなりましたが……」

「何の戯言だ……」

据わった目のナパーム。

「そちらこそ、我々に見えないと思っているのですか……随分薄汚れて粘着力だけはあるしそんな身体をしていますよね……我々ロボツトに寄生できるという随分変わったロボですね……」

「わかるのか、クリスタル！」

「ええ。そして製造番号はK-857という……人間の世界ではまるで悪霊みたいなものといえわかりやすいでしょうか……寄生し、ウィルスを送り続けることで相手の身体を自由自在に操るといふロボットですよ」

ナパームの顔が強張っている——どうやら凶星のようだ。

ジャイロは驚きを隠しきれない。どうしてまた——解析能力ならばクリスタルと自分は大差のないはずなのに自分はまったくわからなかったのに——敵の正体を見破るガーネットは一段と輝く。

「この水晶たちのおかげで、私にはお前の苦しむ姿が見えた！」

「……」

どうやらクリスタルの占いによるものだということがはっきりとわかった。

しかし、そんなことナパームに寄生している……えっと、K1857とやらは気付いてはいない。そもそもロボットが占いを信じているということ事体理解していないのだろうけど。

少し頭痛がしてきたジャイロ。

「K1857……ね……」

スターの呟きは誰も聴いてはいなかった。

「お客様、全員避難終了しました」

制御室から一番遠くにいたのは、チャージ・オレンジことチャージマンだった。

グラビティーの能力で空中になすすべなく漂っている暴走警備ロボたちを後目にチャージは頑張っていた。

「チャージ・オレンジ、ありがとう」

たまたま足の遅い女の子を担いで避難場所まで誘導したのでオレンジの汽車ロボは照れてしまう。

「いえいえ。われわれの使命は人（お客様）のため、ですから謙遜する汽車ぽつぽ」。

でも、その顔はいつもより赤を帯びている。

「おい、オレンジ！」

「あ、親方！」

親方は咄嗟にチャージに石炭を手渡す。

「お前も、急いで制御室のほうに向かってくれないか」

「は、はい」

司令官……もとい親方の命令は絶対である！（時給戦隊アルバイターメモ9）

陸路ではワイリーナンバーズの中でクイックマンやターボマンにも負けない速さを持つチャージマン。

それに今の彼は石炭を持っている。

口にくわえ、ガリツと音をたてて石炭を飲み込む——汽車の煙突の煙が噴射し、チャージのモニターの速度調節器が速急に切り替わる。

ポッポー！

「ガンバレー、オレンジ！」

「僕らの遊園地を守って！」

避難させた子供たちの声援を受け、今、チャージは制御室に向かっ

て発進した。

オレンジは石炭を食べるとより早く走れるのである！（時給戦隊
アルバイターメモ10）

「悪いな」

同じくお客様の安全を確認し終え現場に向かっていている途中のストーンマンを肩車する。

「チャージ、僕も！」

襲い掛かって来る警備ロボをすべて宙に浮かせたグラビティーマンを頭に担ぐ。

「チャージ、すまん！」

それと、水を操る能力を持つウェーブマン——グラビティーの補佐をしながら警備ロボと一緒に一掃していた——をお姫様抱っこ……。

「予想できたが、実際やられると悲しくなるな……」

ウェーブマンの目じりから流れる水滴はけて幻ではない。

ここ元祖のチャージだから。エグゼミたいでかくて本物の汽車みたいなナビで百人乗っても大丈夫なほうではない、ヒト型ロボットだから。

とにかく彼らもまた制御室へと向かっていた。

「で、どうすればナパームからその…… K-857だけを取り出せるのだ？」

クリスタルの言うことが本当だとしたら……相手の動揺から察するに本当なのだろうけど、肝心の摘出仕方はどうすればいいのかジャイロはわからない。

「そ、それは……ですね、いわゆる……愛ですかね」
「……」

占いに出た結果だけをいつてあとは愛で逃げますか。
クリスタル、話をはぐらかしていた。

「攻撃よ」

凜とした発音。
スターの声だ。

「この手の機種は宿り主の神経パレスも一緒になっているのよ。機種が耐えられないくらいのダメージを与えれば勝手に飛び出してくるわ」

「そ、そうなのか？」

「ええ。でも飛び出したとき、自分たちが寄生させられないように細心の注意を払わないといけないけどね……まあ、その点はミーのスターバリアーで解決だけだね」

ハッキング中にナパームの状況も覗いたのか、流れてきたのか知らないが……スターの意見を信じるしかない。

「わかった……間接技でいけてことだな」

スター・バリアーを展開しているといえども、直接攻撃では星が入る隙間がなくなり、入り込まれる可能性が増えてしまうのだろう。

クリスタルの腕の水晶の光が点滅しだす——クリスタル・アイを制

作しているのだ。

ジャイロも隠し持っているジャイロ・アタック用の武器の弾数を確認する——三枚——アミューズメントパークのアルバイトというわけであり多くは持つてきてはいないが、エネルギーがある限りは作り出せるクリスタルのフォローにまわりつつ攻撃すればいい。

そして、それには——。

「攻撃のタイミングはスター、お前の合図に任せてもらっからな」
「了解」

冷静な司令塔に任せればいい。

スターの声とともにクリスタルとジャイロの瞳に金色の文字が羅列する。

二体の電子頭脳がスターのコマンドにあわせるために自我のプロテクトを一部解除したのだ。解除に伴い、間を入れずにスターの無線コードが繋がり、二体のメモリーに流水のごとくスターの考える攻撃手順が流れ込んでくる。

今のクリスタルとジャイロはリーダーの手足と同じ。

加速する。

思考パレスが充たされ、シンクロし——三体の一切無駄のない動きが紫の巨体に容赦なく襲い掛かる！

「クリスタル・アイ！」

右手から丸い水晶のように透明ではあるが重圧のあるエネルギー弾が飛び掛る。

「ぬう……」

寄生されたナパームはその巨体のため、上手く避けきれずにいる。火器使いであるこの体は頑丈にできている。水晶が作り出すエネルギーはなんかではびくともしない筈だった——。

「ジャイロ・アタック！」

——ジャイロの思考パレスに共振し、投げ出されるそれはナパーム

の重要な配線に飛びついた。

「なに！」

体内の爆弾を発射させるための、ケーブルが切断された。

「これでもう爆弾は使えないわよ！」

まず、狙ったのはそれだ。

ナパームの装備されている銃器、火薬はワイリーナンバー一の量を持つ。

アルバイトで装備する分量を減らしているのだが、この遊園地を破壊する分だけの爆薬は装備されていたはずだ。

「なぜ……まずはこの身体を真つ二つにすればいいものを……」

「この世（遊園地）の崩壊を防ぐのも時給戦隊アルバイターの使命だから、よ」

時給戦隊アルバイターのみなさんの遊園地エインパークを守っているのだ！（時給戦隊アルバイターメモ１１）

「それに、もし弁償といったことになったら……」

時給戦隊アルバイターが誕生した一因であるが……フォルテが暴れて、修理代弁償のため給料がない状態が続いたことは苦い記憶である。

時給戦隊アルバイターのデビュー戦は某世界征服を狙う悪の科学者の最強の『黒いの』（名前はプライバシーの問題で表示できません）である！（時給戦隊アルバイターメモ１２）

「まだ、未成年だから後悔は出来ないけど……」

スターの目じりに一筋のしずくが光る。

「ちよつとスター、ロボットに未成年っていう言葉あるのか！ そ

れにワイリー博士はどう見ても未成年には見えないぞ！」

「あの……ジャイロ、実名はすでに文章内に表示されていますよ」

それでもメモ中には当インパークの良識と倫理に基づいて肖像権は守られていかなければならないのである！（時給戦隊アルバイターメモ13）

「そういえば、我々に関する記述はちゃんと偽名……げふん、げふん、リングネームのほうで表示させられていたな」

ジャイロ・グリーン、納得。

「こんなおしゃべりで時間を無駄にしないで、K1857、覚悟！」

結論からいうと、おしゃべりをしていた時間はまったく無駄ではなかった。クリスタル・スカイの胸の水晶が光り、四方から、莫大なエネルギーを持ったエネルギー弾が発射されたのだから。

@ちなみに作者はそれに避けきれず、スカイとの戦いのさいはE缶を使用して（しかも弱点武器のジャイロ・アタック使用の上）撃破しているのである！（へたれプレイヤーメモ1）

閃光が走った。

そして倒れているナパームの後ろに……巨大な影が現われる——これがK1857なのである。クリスタルが言っていた通り、薄汚れて粘着力だけはありそうな……スライム上の敵。これがロボットだというのは——イエローデビルやスペーススルーズのマークユリ——などの例を見るとまあ、いても問題がない気がしないでも。

いや、博士以外にイエローデビルシステムを使用しているというのがジャイロは驚いた。

「くそ、どこでデータが盗まれたのだ……」

あのシステムは博士独自のものだ。

それが得体の知れないロボットに有用されているというのに腹が立つ。

「ふん……」

荒い息——どうやら呼吸系統のシステムに異常が出たのである——
「ざまあみろ、とほくそえむがK-857の厭らしい声自身はまったく衰えていない。」

「原始的な、こんなメカでは我力が開放しきれなかったのが、道理よ……」

「なんだと……」

仲間を、卑下する言葉。

抑えている感情プログラムがカチンとくる。

しかし、ジャイロもクリスタルもK-857に言い返さなかった。

彼が、いいたいことをすべて言ったからだ。

「言ってくれるじゃない？ でもね……あんなたちがどんな力を持っているかは知らないけど、あの星が、君にも見えるだろ……」

スターマンの作り出す幻想的で敵対者に容赦がない黄金の星たちが輝く。

「この星が輝き続ける続ける限り……ロックマンにヤラレルならともかく……こんな、よくわからない馬の骨にいいようにあつかわれるのはね……ワイリーナンバーズとしての誇りが許さない！」

「スター……」

ナンバー上はジャイロのすぐ下の弟機であるスターマンではあるが、五期ナンバーズのリーダーとして君臨するには戦闘、情報能力のほかに理由がある。

父、ワイリー博士への忠誠心とナンバーズとしての誇り。

「まったく、そうだな……」

付き物がとれ、自由に動けるようになったのか、ナパームが起き上

がる。

あちこちシヨートはしているが……やわな身体ではない。

「ナパーム！」

蒸気を噴出してやってくる四体。

「リーダー、遅くなつてすまねえ！」

「お客様の安全を守りきった時間なのだから、仕方がないわよ」

KI857を囲い込むように五期メンバーズ八体全員が終結した。

「あなたの決定的なミスは我々を怒らせたことです」

クリスタル・スカイは冷酷に宣告する。

「そうだな……ナパームや、この遊園地を楽しんでいた子供たちを恐怖にさらさせたことも……万死に値する」

普段は穏健であるが、今は死刑執行人ストーン・ブラウン。

「そう、われら、八体……」

ウェーブマンが合図を送った。

その合図でみんなはいっせいに集まり、名乗る！

「……時給戦隊アルバイター！」

時給戦隊の後ろの水がザーと勢いよく噴出する——今回は滝をバツクにお楽しみください。

理由：ナパームは今手持ちの爆弾が少ないため、ポーズ用に使う分を節約したため。

「行くぞ！」

「轟け！」

「……モードB！」

モードBとは時給戦隊アルバイター八体全員の力を結集した最大かつ最強の技である。モードBのBは『バッチリ』のBであり、この技の命名者でかつコンビネーションを作り出したのは彼らを作った偉大なる父である！（時給戦隊アルバイターメモ14）

灼熱猛攻、チャージ・タツクル！

清流龍滝、ウォーター・ウェイブ！

必中水晶、クリスタル・アイ！

爆撃炎上、ナパーム・ボム！

絶対星域、スター・バリアー！

重力制圧、グラビティ・ホールド！

回転疾風、ジャイロ・アタック！

岩石執行、パワー・ストーン！

「ぎゃあああああ！！！！！！！！」

断絶魔が振動する。

こうして時給戦隊アルバイターの活躍により世（遊園地）の平和が取り戻されたのだった。

「わあ、かつこいい！」

お子様、大熱唱。

監理モニターとアルバイターたちの目につけられたカメラからとれた映像をせっせと編集し、今日来たお客様にお詫びの品として手渡す、スタッフ一同。

「……こんなのでいいのか、な……」

目的の遊具に全部乗れなくても、また今度がある。

しかし、時給戦隊アルバイターの活躍を捉えたDVDは今日だけという特典がつけたのか、お客様は終始笑顔でいる。

ちよつと複雑の思いをするのはグラビティー。また父に、ロックマン相手ではだめなのに遊園地ではこんなに活躍しおつてと愚痴られるだろう。

「いいんじゃないか」

逆にあつさりしているのはウェーブ。

チャージにお姫様抱っこされているシーンをカットできたのもう良し！としているらしい。

「それに、な……」

エコノミストのウェーブが非常にいい顔をしている——理由を聞いたグラビティーもまた笑顔が移る。

「みんなに言つた？」

「いや、まだだが……」

「じゃあ、僕言ってくるね」

風船を配りながらあちこちを廻つてだらうけど。ばたばたと歩く、グラビティー。

「お、おい……」

自分たちに装備されている無線を使えば瞬時に解決できるというのに……。

「まあ、いいか」

まだ終わっていない南側の便所掃除に向かうため、ウェーブも歩き出した。

それは、夕焼けでできた大きな影に這いつくばって逃れていた。

「く……こんな稚拙な科学力のないところで……」
倒されたくはない。

KI857はまだしぶとく残っていた——時給戦隊アルバイターの活躍により、霧散爆破した身体ではあるが何とか使える部分を組み合わせ、残っていたのだ。

ふいにKI857がいた場所の影が大きく広がる。

日が傾いた、としても早すぎる、大きさ。

KI857のセンサーがその原因となったモノを見据えたとき、戦慄が走る。

——金色に輝く星。

「やっぱり、まだ残っていたようね……」
DOWN037 スターマンだった。

「ナ、なぜ……気が、ついた……」

「ふん……そんなの……」

スターは敵の前に徐に己の心臓部を開く。

地球製のコードが無数巻かれているが……スターマンの動力庫につながれているメモリーには覚えがある。それは……遠い昔に、見た、地球で見えてはいない、懐かしくも二度と見たくない機材。

「ま、まさか……お前……」

「地球を征服するのはワイリー博士と決まっているのだから、あんたみたいなよそ者……もう来ないで欲しいのよ……K1857」

その一言が遊園地に混乱を与えた憎い存在に向けてスターマンが冷酷に放った最後言葉だった。

金色の星が、碎ける。

「ふう……」

白い煙だけがアスファルトの影に残っていた。

「あ、スター！」

だが、その煙もグラビティーが移動するときできた空気の流れによつて四散する。

「あら、グラビティー」

「あれ、リーダー？ 怖い顔しているけどどうしたの」

「なんでもないわよ」

そう、なんでもない——じぶんがまだスターマンという名を第二の父ワイリー博士につけられる前の遠い、遠い愚かな星の文明の遺物を処理しただけにすぎないのだから。

「ところでどうしたの、グラビティー……なんかいいことがあったような……」

「そうだよ、スター！ 今日ね……特別ボーナスがつくって！」
嬉しさのあまり、破顔する。

心と感情と仲間のため——そして大いなる父の野望の手助けをするために！

今日も戦え、時給戦隊アルバイター！

明日も笑顔を絶やすな、時給戦隊アルバイター！

守れ！ 遊園地の平和を！！

祈れ！ 時給UPを！！

給料日がくるその日まで！！

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター（後編）（後書き）

敵キャラはオリジナルです、実際には出ません。

一応舞台はロックマン7以降で8前、ロックマンワールド5のイベント終了時の彼ら、といった所です。

もしこれからも書く機会とネタあったならば…… 大方この設定時期で書き足していきたいと思っています。

あるかどうか…… わかりませんけどね。

読んでくれた方、稚拙なものでしたが、楽しんでくれたのならば幸いです。

そしてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6031e/>

それゆけ！ 時給戦隊アルバイター

2010年10月11日13時01分発行